

2017年3月6日

主催（公財）ミズノスポーツ振興財団

「2016年度 ミズノ スポーツライター賞」受賞者決定

公益財団法人ミズノスポーツ振興財団では1990年度より「ミズノ スポーツライター賞」を制定し、スポーツに関する報道・評論およびノンフィクション等を対象として、優秀な作品とその著者を顕彰しています。

27回目を迎える本年度は、3月6日（月）、グランドプリンスホテル高輪で2016年度選考委員会を開催し、受賞作品および受賞者を以下の通り決定いたしました。

なお、この「ミズノ スポーツライター賞」の表彰式は、4月18日（火）にグランドプリンスホテル新高輪で行います。

【ミズノ スポーツライター賞 最優秀賞】（トロフィー、副賞100万円）

- ・『スポーツ新考 地域戦略を探る』 山陽新聞社 スポーツ企画取材班

【ミズノ スポーツライター賞 優秀賞】（トロフィー、副賞各50万円）

- ・『一投に賭ける 溝口和洋、最後の無頼派アスリート』（角川書店）
上原 善広（うえはら よしひろ）
- ・『サッカーと愛国 SHOW RACISM THE RED CARD!』（イースト・プレス）
清 義明（せい よしあき）

詳細は別記の通りです。

記

- 名 称： 2016年度 ミズノ スポーツライター賞
- 制 定 目 的： スポーツに関する優秀な作品とその著者（個人またはグループ）を顕彰し、スポーツ文化の発展とスポーツ界の飛躍を期待するとともに、これからの若手スポーツライターの励みになる事を願い制定
- 選 考 対 象： 主として新聞・雑誌・単行本などを通じて書かれたスポーツ分野の報道・評論・ノンフィクション等で、当該年度に発表されたもの
- 選 考 委 員： 委員長 岡崎 満義（元(株)文藝春秋取締役、「Number」初代編集長）
委 員 上治 丈太郎（(公財)東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 参与）
〃 杉山 茂（スポーツプロデューサー、元NHKスポーツ報道センター長）
〃 ヨーコ ゼッターランド（スポーツキャスター）
〃 高橋 三千綱（芥川賞作家）
〃 水野 英人（(公財)ミズノスポーツ振興財団 副会長）

※順不同

対 象 者：日本人および日本在住の外国人

受賞者及び選考理由：

【ミズノ スポーツライター賞 最優秀賞】

●『スポーツ新考 地域戦略を探る』

山陽新聞社 スポーツ企画取材班

2016年元旦に掲載を開始し、6月24日まで8部構成で展開した大型企画である。第1部「この指とまれ」が13回、第2部「輪になろう」が8回、第3部「大空の下で」が10回、第4部「きょうも元気で」が8回、第5部「ともに進もう」が8回で、それぞれしめくくりとして有識者などへのインタビューを載せた。その後、提言編として6回、番外編が3回ある。尚、プロローグとして「熱源」と題した記事が最初に5回掲載された。

この連載は重量感のある大作だが、まず企画としての「建て付け」がしっかりしている点を評価したい。1～5部のしめくくりには有識者の意見を示すことで「くぎり」とし、ストーリーを次のテーマに引きずらない工夫がされている。全国的に高まるスポーツ熱を競技力向上だけでなく、地域社会に生かすことはできないだろうか、という発想からこの連載は始まる。スポーツチームやイベントを“公共財”“地域資源”として捉える新しい考え方に沿って、「感動を共有することで生まれる一体感など新しい価値観を考察するとともに、地方都市の課題解決につながる手だてを掘り下げ、発信する」と連載初回に目的を記しているが、それが十分に果たされた記事になっていると思う。いずれにしても久方ぶりの新聞部門での力作であり、地方紙が地域の暮らしを見据えて、じっくりと取り組んだ企画ものとして今後のモデルにもなり得る作品といえる。

【ミズノ スポーツライター賞 優秀賞】

●『一投に賭ける 溝口和洋、最後の無頼派アスリート』（角川書店）

上原 善広（うえはら よしひろ）

やり投げで1984年のロサンゼルス五輪、1988年のソウル五輪に出場し、1996年に34歳で現役を引退したアスリート、溝口和洋。本書は、大阪体育大学で一時期円盤投げをやっていた著者が、溝口の強烈な個性と競技をとことん極める姿勢に惹かれ、18年にわたる付かず離れずの付き合いから溝口の評伝を彼自身になりかわって一人称文体で書いたものである。その実験的な方法論といい、やり投げという競技をとりあげたことといい、これまでのスポーツ・ノンフィクションにはなかったタイプの作品である。

執念と怨念で技術面でも様々な工夫をし、世界で初めての試みを自分のものにしていく溝口。すべて、コーチは置かず、一人で。トレーニングパートナーや通訳もしてくれるトレーナーはいたが、コーチの助言を求めず、他人に何を言われようが、自分が納得すればそれを貫き通した。あえて自分から壁を作って愚直とも哲学的ともいえる姿勢で競技に取り組む、その姿から、今はほとんどいないであろう「最後の無頼派アスリート」。究極の「この一投」に賭ける破天荒な生き方は溝口にしかできないものだった。「溝口はまさに『全身やり投げ選手』だった。彼が編み出したやり投げのためのテクニックとトレーニングは、そのまま彼自身の存在意義と哲学にまで昇華されていた」（著者あとがき）ことがよく書き表された、とても面白い読み物である。

●『サッカーと愛国 SHOW RACISM THE RED CARD!』（イースト・プレス）

清 義明（せい よしあき）

サッカーとナショナリズムの強い親和性に触れ、村と村との闘いから始まったその歴史に注目し、サッカーが発展した19世紀、故郷から都市に働きに出た労働者たちはサッカーチームに故郷の代替物を見出した。共同体としての認識は「私たち」とそれ以外の人々とを分けるものとなり、サッカーの試合は敵と味方を分かりやすく見せる仕掛けになった。敵対する他者の存在は、排外主義や差別主義をたやすく助長させる危うさを秘めている。それでいてサッカーは、FIFAの理念にも掲げられているように、世界の人々が肌の色や言葉や宗教を超えて一つになる働きも確かに秘めている。本書はこうしたサッカーにおけるナショナリズムの複雑な様相を、国内外でのフィールドワークや関係者への取材をもとに現状レポートしながら前景化し、それとともに欧州サッカーの事例を紹介しながらその後景にあるコスモポリタニズムにも目配りして読み解こうとするものである。

全体として本書は、スポーツとナショナリズムの関係を多面的にとらえ、その危険性と共にその可能性にも注目した視野の広いルポルタージュであり、日本の動きと世界の動きを連動させながら論じて説得力がある。著者は各国のサッカー事情に詳しく、自身の取材からも、文献からもたくさんのかんことを身につけている。今まで「なんとなく知っていた」サッカーとナショナリズム、民族主義を、ヨーロッパ全体に広く目を向けて解説し日本の事情と対比して見せてくれた点でも貴重な一冊といえるだろう。

以上

（お問合せ先）

公益財団法人ミズノスポーツ振興財団事務局 内橋・古川 TEL. 03 (3233) 7009
ミズノ株式会社 広報宣伝部 東京広報課 林・山本 TEL. 03 (3233) 7037